

## 願いをもって対象と関わり、気付きを広げ深めながら、くらしを豊かにする子どもの育成 — ようちえんのともだちと、なかよくなるろう ～レッツ・ゴー ミニえんそく～ —

### 1 単元のねらい

年長児とともにミニ遠足を楽しむにはどうしたらよいかを考えることで、年長児と進んで関わろうとしたり、年長児との関わりを楽しんだりすることができる。

### 2 授業の構想

#### (1) 子どものとらえと資質・能力について

本校の1年生は様々な園所から入学してきていることもあり、入学当初は緊張した面持ちで学校生活を送っている姿がよく見られた。しかし、入学直後からの自己紹介活動、学校探検などを通して、次第にお互いのことが分かるようになり、会話を楽しんだり遊んだりする姿が見られるようになった。

本校では、6年生が1年生の世話をする場面がたくさん見られる。1年生に対して6年生が毎朝のように教室に来て、ランドセルから教科書やノートを出して引き出しにしまったり連絡帳や提出物を教師の机に置いたり、献身的に1年生の世話をしている。休み時間には教室や中庭で一緒に遊んだり、給食の盛り付けや配膳を手伝ったりもしている。また、2年生とは、学校探検で校内を案内してもらったり、サツマイモ栽培・収穫を年間を通して教えてもらったりして交流を深めてきた。

このように、異学年で交流することを通して、上学年のお兄さんお姉さんの姿を間近で見ながら「お姉さんはやさしいな」と上学年にあこがれをもったり、「こんなお兄さんになりたい」という願いをもったりする1年生はたくさんいる。そして、様々な異学年交流活動で感じたことや学んだことを今後の異学年交流活動の場でいかしてほしいと願っている。

本校では平成20年度から、1年生と附属幼稚園の年長児との交流活動を生活科の学習のひとつに位置付けて年間を通して行っている。「わいわいランド」という名称で、1学期は1年生が幼稚園の園庭に行き一緒に遊んだり、年長児を小学校の中庭に招待し1年生が考えた遊びを一緒にしたりする活動を行ってきている。このような交流活動を行うことは、異年齢の子どもとの関わりを深めたり、そこから成長した自分に気付いたりする場となっている。

本単元では、年長児と一緒に北公園にミニ遠足に行くに当たって、これまでの異学年交流活動をふまえ、今度は自分たちが世話をする立場となることから、自分だけでなく年長児も楽しめるミニ遠足するにはどうすれば良いのかを考えた。2年生とのこれまでの交流を通して自分たちが上学年にしてもらっていたことを想起したり、これまでのわいわいランドでの経験を振り返ったりすることで、年長児と一緒に楽しめるミニ遠足するにはどうすれば良いかを考えた。そして子ども一人一人が考えたことをミニ遠足紹介パンフレットにしてまとめ、年長児にミニ遠足について紹介した。1年生の「年長さんと一緒に楽しみたい」「年長さんのお世話がしたい」という思いや、年長児の「ミニ遠足が楽しみ」「1年生さんと一緒にミニ遠足に行きたい」という思いがさらに高まったところでミニ遠足に出かけた。手をつないで安全に気をつけて学校と北公園の道のりを歩いたり、北公園で年長児とともに楽しめる遊びを一緒に行っ

たりした。

このような活動を通して、「もっと〇〇してみたい」という思いや願いから、相手意識をもちながら「こんなことに気がついたらいいんじゃないかな」「こんなことをすると喜ぶんじゃないかな」という思いや願いの高まりを期待した。そして、年長児との関わりの楽しさに気付くとともに、自分自身の成長にも気付いてほしいと願った。

## (2) 資質・能力をはぐくむために

そこで、本単元を構成するに当たっては、以下の3点を大切にしていきたいと考えた。

### ① 願いをかなえようとする問いが生まれる対象との出会わせ方を工夫する

単元の導入として、子どもが「幼稚園の年長さんとまた遊びたい」「年長さんとどこかに行きたい」という思いや願いをもつことができるように、これまでの年長児との交流活動を想起させる。そうすることで「これまではこんなことができたね」「今度は〇〇をしてみたい」「今度は、〇〇なことを考えてやりたい」という思いや願いをもつと考える。そして、2年生と行ったサツマイモ栽培などを想起させながら、今度は立場を変えて自分たちが上学年として年長児を世話したい、一緒に楽しみたい、そのためにはどんなことができるのかを考えることができるようにする。

### ② 一人一人の追求を支える対話

子どもの「こんなことして遊びたい」「こんなふうにお世話したい」などという思いや願いが実現するように、その時々思いや願いをとらえることが大切である。子どもとの会話や子どもが書き記したものから子どもがこだわっていることや追求していることを具体的にとらえて把握する。そして「〇〇さんは、こんなことを考えているんだね」と思いを整理したり、「〇〇をしてみたら、どう」と提案したりしながら関わっていくことで、子ども自身が追求していける環境を整えることができると考える。

### ③ 気付きが広がり深まるための学び合いの設定を工夫する

年長児とどんなことがしたいのか、そのために1年生としてどんなことができるのかを考える中で、子どもは「こんなことしたらいいんじゃないかな」「どうやったら年長さんが喜んでくれるかな」「こんなことができるかも」という気付きや思い、願いが出てくるであろうと考える。また、「友だちは、どんなことを考えているのかな」「友だちの考えも聞いてみたいな」という思いや願いももつであろう。そのような時、子ども一人一人がもっている気付き、思いや願いをその子ども一人のものにするのではなく、お互いに教え合ったり伝え合ったりする中で、それらを共有する。そうすることで、一人の気付きが周りの子どもに広がったり、気付きがさらに深まったりしていく。そして次の活動に向かっていく意欲を高めることができると考える。

## 3 展開計画（全15時間）

次	時	主な学習と具体的な学習・内容	◇願う子どもの姿
1	1	○異学年交流活動を振り返ろう ・これまでのわいわいランドや2年生との交流活動を想起する	◇1年生としてわいわいランドで意識したことを考えている
	2	・ミニ遠足に行くに当たって、年長児に何ができるかを考える	◇年長児に楽しんでもらえる方法を進んで考えている

2	3	○ミニ遠足の準備をしよう ・ミニ遠足の下見に行く計画を立てる	◇年長児とともにミニ遠足を楽しむという見通しをもっている ◇年長児とともに楽しむという視点で下見をしている
	4～6 7・8	・ミニ遠足の下見に行く ・ミニ遠足の下見で見つけたことや気付いたことを伝え合う	
	9・10 11	・紹介パンフレットを作成する ・年長児に紹介パンフレットを紹介する	◇下見を通して気付いたことを、年長児に分かりやすいように紹介パンフレットとしてまとめている
3	12～14 15	○ミニ遠足に行こう ・年長児と一緒にミニ遠足に行く ・ミニ遠足を振り返る	◇年長児と進んで関わろうとしている

## 4 授業の実際

### (1) 願いをかなえようとする問いが生まれる、ミニ遠足との出会わせ方

まず、「年長さんと遊ぼうパート1・2」や「わいわい秋まつり」といったこれまでのわいわいランドの活動を振り返った。子どもたちは特に、わいわい秋まつりで年長児のことを考えながらおもちゃを作ったこと、年長児に喜んでもらうにはどのようにしたらよいかを考えながら関わったことなど、年長児との様々な関わりや、その時の自分の気持ちなどを思い出していた。

わいわい秋まつりでは、私のお店に年長さんがたくさん来てくれてうれしかったです。年長さんが楽しめるように、おもちゃに飾りをつけたり、プレゼントを用意したからだと思います。年長さんに優しくすることもできました。だけど、上手に遊び方を教えることができないこともちょっとありました。だから今度のわいわいランドでは、北公園に行くから、遊具の遊び方とかをちゃんと教えてあげたいです。早く北公園に行きたいです。  
(児童A)

児童Aは、わいわい秋まつりでの年長児との関わりを振り返りながら、上手に関わることをできたこととできなかったことを自分の中で整理し、次のわいわいランドでは、遊び方を上手に教えてあげたいという願いが生まれていることが分かる。わいわい秋まつりでの経験を次の活動に生かそうとしていることがうかがえる。児童Aのように、子どもたちの多くに「また、年長さんと一緒に遊びたい」「次は、もっと上手にお世話したい」という思いや願いが生まれていることが分かった。これらのことから分かるように、これまでのわいわいランドでの活動を振り返り、楽しかったことだけでなく、上手にできたこととできなかったことなどを振り返ることは、子どもに「次は〇〇のようにしてみたい」「今度はもっと上手に関わりたい」「早く次の活動がしたい」というさらなる活動意欲、思いや願いを引き出すことに有効であったと考える。

### (2) 北公園での下見における追求を支える対話

第3時で、北公園の下見に行き年長児が楽しめそうなことや気をつけることなどを見ることや考えておくことを出し合ったこともあり、子どもは下見で何を見るのか、どんなことを考えるのかという視点をしっかりもって活動していた。「この横断歩道は車がたくさん通るから、ちゃんと手を挙げて渡らないとね」と行き帰りの道で気をつける場所を確認したり、「公園には大きな川があるから、近づかないように教えてあげよう」と危ない箇所を見つけたりしていた。1年生として年下の年長児を「お世話しなくていけない」「安全に気をつけて、楽しませたい」という意識の高さがうかがえた。しかし、1年生にとってこのように年長児という自分以外の人を楽しませるという視点で北公園の下見をすることは決して簡単なことではない。前

時に下見の視点を全員で考え確認していたとしても、実際に下見に行くと、自分の遊びに夢中になったり、気をつける場所やおすすめポイントを見つけることができなかつたりする子どももいた。

あのね、今日、北公園で危ないところはあるか、どんな遊びができるのか見に行ったよ。危ないところはいっぱいあったけど、あとはそんなに見つからなかったよ。だけど、すべり台で遊んで上から見たら遠くの山がよく見えたからおすすめポイントに決定したよ。〇〇ちゃんが見つけたのを聞いて、おすすめポイントや危ないところをもっと考えたいです。  
(児童B)

児童Bは、北公園に下見に行った時、おすすめポイントや年長児が楽しめそうな遊びをなかなか見つけれずにいた。そのような時に「実際に自分で遊具で遊んでみると楽しさが分かるかもしれないね」と声をかけ、まず自分で遊具で遊んでみることで遊具で遊ぶ楽しさに気付かせるようにした。また、秋見つけの時にどんぐりをたくさん見つけ拾っていた子どもに「秋見つけの時、あのあたりにどんぐりがたくさん落ちてたよね」と前回の活動を想起させることで、おすすめポイントを見つけることができるようにした。そのようにすることで、子どもは公園の中を歩き回りながら「ここは四つ葉のクローバーがたくさんあるから、おすすめポイントにしよう」とおすすめポイントを決めたり、実際に自分で遊具や広場にある樹木で遊びながら「この木に登るといい景色が見えるから、教えてあげよう」「この広場では鬼ごっこができるね」と、年長児が楽しめそうな遊びをたくさん考えたりしてはメモすることができた。(図1) このように秋見つけで北公園に行った時のことを想起させたり、遊具で遊んでみるよう声かけをしたりすることで、子どもは年長児を楽しませるためにパンフレットに書く内容を見つけたり考えたりすることができた。



図1 ミニ遠足の下見

### (3) 下見を通しての気づきを広げ深める学び合いの設定

第7・8時で、北公園に下見に行って見つけたことや考えたことを伝え合った。下見では班ごとに動き、それぞれが見つけてきたことをメモしていたが、それでは一人一人の気づきが個人の中でおさまって終わってしまう。そこで、一人一人の気づきを全体で共有し、気づきを広げ深めるために、こどものもつ「見つけてきたおすすめポイントを友だちに教えてあげたい」「友だちはどんなことを見つけてきたのか、知りたい」という思いや願いを取り上げ、学び合いの場を設定した。

子どもは、下見でたくさんの遊び方を見つけてきていた。しかし、そこには遊びの際に気をつ

けることという視点はなかった。1年生とは体の大きさも安全に関する知識も異なる年長児をお世話するには、安全に気をつけて年長児と関わることに気付いてほしかった。そこで教師から、「小さい子は大丈夫かな」と子どもに考える視点を与えるはたらきかけを行った。する

- 児童C：広場があったから、そこで鬼ごっこもできます。
- 児童D：いろんな遊具があって、遊具で遊べし、それを使ってかくれんぼもできると思う。
- T1：北公園にあった遊具って、結構高いよね。年長さんはだいじょうぶかなあ。
- 児童E：遊具は気をつけて遊ばないとけがするから危ないよ。
- T2：じゃあ、川の近くと一緒に危ないね
- 児童G：遊ぶときの約束を作ればいいんじゃない。
- 児童F：危ないところになると遊具で遊べないから、危なくないように遊び方を教えてあげればいいと思います。
- 児童H：「綱をしっかり持って、気をつけてね」ってパンフレットに書けばいいよ。
- 児童I：楽しい遊び方だけじゃなくて、遊びのルールもパンフレットに書けば、年長さんがけがしないね。

と子どもは、「ブランコで遊ぶときは、座って乗るようにする」「すべり台をは一人ずつすべる」など、遊び方をより具体的に考えることができた。また、それらをパンフレットに書く内容として追加することで、より年長児が安全に楽しくミニ遠足を楽しめるようにしようという意識が出てきた。このように、子どもの気付きを広げるとともに、新しい視点を与えるために掘り下げるはたらきかけをすることで、気付きの深まりが見られるようになった。

### (3) 気付きの広がりや深まりをねらうためのパンフレット作りにおける学び合いの設定

パンフレット作りでは、子どもは下見やその後の学び合いを通して気付いたことや考えたことをパンフレットに書き込んでいた。おすすめポイントや遊具などでの遊び方、気をつけることといった内容だけでなく、「写真を貼った方がよく分かるかも」「公園の地図も入れよう」などと、書き方についても考えながら、年長児が「ミニ遠足が楽しみだな」「ミニ遠足に早く行きたいな」などとミニ遠足を楽しめるようにするために必要だと思われることを考えていた。



図2：パンフレット作りの様子

年長さんが、「楽しんでくれるように」「早く行きたくてたまらないなあ」って思ってもらえるように心を込めてみんなで一生懸命書きました。絵や写真や字を書いて分かりやすくしたよ。(中略) 友だちのパンフレットを見たら公園の地図やおすすめポイントが面白そうに書いていたから真似してみたよ。上手にできたから、早く年長さんに紹介したいよ。(児童C)

児童Cは、パンフレットを書き始めたものの、途中で何を書いたらよいか分からなくなり困っている様子が見られた。そこで児童Cが下見で一緒に行動していた友だちのパンフレットを紹介し「〇〇さんは、こんなことを書いていたよ」と紹介した。すると、四人で一緒に「川の近くにどんぐりがいっぱい落ちているところがあったよね」「わたしは木登りが楽しいことを絵でかいたよ」等と話をしながらパンフレットに書きたいことを相談しながら書き始めた。他の子どものパンフレットの書き方を見ることで、児童Cはパンフレットに何を書いたらよいか、どのように作り上げていけばよいかを考えることができた。

## 5. おわりに

単元の導入として、これまでのわいわいランドの活動を振り返ることで、子どもたちの中に「年長さんともっと遊びたい」「今度はもっと上手にお世話したい」という気持ちを高め、これまで関わっていない場所で、これまでやったことのない活動としてのミニ遠足につなげることができた。この「やりたい」という思いの高まりがあったからこそ、単元を通して、「年長さんが楽しめるように」という願いをもち続け、下見をしたり、パンフレットを作ったりすることができたのではないかと考える。

また、パンフレット作り際には、「教えてほしい」「上手に作れたから友だちに見せたい」「友だちはどんなパンフレットを作ったのか見てみたい」という願いが出てきたところで、少人数もしくは全体での学び合いを行った。パンフレット作りで困っている子どもがいたら、どこで困っているのかをとらえ、友だちのパンフレットを見るように声かけしたり、同じようなパンフレットを作っている子ども同士を集め、どのようにパンフレットを作っているのかを相談できるようにした。そうすることで、「あっ、〇〇のように書けばいいんだ」と、これまで気付いていなかったことに気付くことができた。(文責 大坂 慎也)